JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2013年2月28日発行 ・・・ 所報No.358

目次

スウェーデン研究連続講座第138回、139回、140回

第138回
「スウェーデンのICT—その産業と社会へのインパクト」
スウェーデン大使館商務部商務官および投資部イベントアドバイザー
林秀樹

第139回
「スウェーデンの参加型教育—その理念教育と実践報告」
北海道東海大大学国際文化学部
川崎一彦教授と川崎ゼミの学生3人

第140回
「スウェーデンデザインと日本文化の融合～私の生死を懸けた闘い」
高級家具製作、輸入会社「都倉インターナショナル」創始者
都倉亮

シリーズ

スウェーデン留学体験シリーズ　アンケートから（最終回）

(社)スウェーデン社会研究所　平成23年度理事会・通常総会・議事録

平成23年度事業報告と決算報告
平成24年度事業計画と予算

スウェーデン社会研究所　所報
No.358 2013年2月28日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階
連絡事務所
〒124-0024　東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail：jiss12@nifty.com
URL：http://www.sweden-jiss.com/index.html

発行人・編集責任者：野崎俊一
Publisher&Editor in Chief : Shunichi Nozaki
編集者：久保田健司
Editor : Takeshi Kubota

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2013年2月28日発行 ・・・ 所報No.358

第138回スウェーデン社会研究講座
「スウェーデンのICT—その産業と社会へのインパクト」

スウェーデン大使館商務部商務官及び投資部イベントアドバイザー　林　秀樹

「ICT(Information and communication technologies)」とは情報通信技術と言う意味ですが、「IT」に比べてあまりなじみがない言葉ではないかと思います。日本の企業においても相変わらず「IT」を使い、「ICT」をあまり認識していないように感じられます。これに対しスウェーデンは逆です。ICTを使い、ITは使っていない。「歴史にIfはない」と言われますが、もし、このIf があったらならば・・・。例えば織田信長が本能寺の変で死んでいなかったら歴史は変わっていたなどの類ですが、もし、スウェーデンにこの「ICT」が実現していなかったら今の世界はどうなっていたか、と言うことです。

電話機

電話機の発明者はアレクサンダー・グラハム・ベル。150年前当時の写真を見ますと、ベルは電話機に向かってしゃべっている。この電話機にはメガホンの形をしている部分はあるが、受話器の部分が見当たらない。実は当時の電話機はしゃべる部分と耳に当てる部分は同じ部分にある。つまり、この部分に相互に口を近づけたり、耳を近付けたりして会話を行っていました。もし、スウェーデンにおいて、ICTの発明がなければ、今でも電話機は当時のままの形をしていたかもしれません。

それはなぜかと申しますと、いわゆる手で持つタイプの受話器を開発したのがスウェーデンの通信機器メーカー、エリクソンの創始者、ラーシュ・マグナス・エリクソンです。彼が1881年に、ベルの発明から4、5年後に先ほど説明した形の受話器を発明し、1884年にはその改良型、そして1890年には今の電話機とそんなに変わらない形のものを発明しています。それでなおかつ、このエリクソンが行いましたのはこの電話機の構成する部品、つまりパーツとして売り出したことです。これによって他の電話機メーカーはそれを利用して同じような電話機を造るようになり、このタイプが急速に世の中に広がったといっても過言ではないでしょう。また、エリクソンは通信機のみならず交換機の分野でも多大な発明をしています。自動交換機がその事例。この自動交換機の導入でどのオペレーターにも接続できることによってお互いのコミュニケーションが飛躍的に増えたことは言うまでもありません。

スカイプ

スウェーデンの発明品の例として「スカイプ」もあります。インターネットを介してコミュニケーションをする通話システム。これは通話のみならず、画像も送信できる。相手の顔を見ながらいわゆる電話会議をすることができ、通話料金も非常に安価か無料で通話することができる。また、相手先が固定電話や携帯電話の場合でも1分間当たり、わずか66銭。このようにスカイプがなかったら、以前として国際電話に頼って通話するとなると費用面では10倍以上に膨れ上がっていたかと思います。

余談ですが、このスカイプはお話したように、創始者はスウェーデン人ですが、この会社を紹介する際に私どもとしてはオランダ大使館とのやり取りでちょっとした論争がありました。と、申しますのは、現在の本社は登記ではオランダにあるところからオランダ大使館側は、「オランダの会社」としてお叱りを受けるのですが、私どもとしては「創始した」と言う事実からスウェーデンの会社として紹介しているわけです。

タッチペン

このペンが登場しなければ今でも医師は手書きでカルテを書いておられるのではないでしょうか。このペンは手書きした物をデータ化し、これをサーバーとかパソコンに送る機能を持っている。紙の上に書く必要はなく、どんな形の上に書いてものでもそれがデータ化され、サーバーに送られる形になっている。スウェーデンの医療機関では広く使われ、救命救急士らが車内でレポートを書く時などに使われており、日本でもパソコン入力される医師が増えていると

聞きます。医師の話ではパソコンに必要データを入力する行為の時に患者さんとの位置が向き合わないで入力するスタイルになることがある。このことを気にする医師から見ると、このペンを使うことによって患者さんとは向き合う姿勢が保たれると言うことです。

電子カルテ

患者さんが別の病院に行くたびに自分の症状などを改めて医師に説明する事態がまだ日本では見受けられますが、スウェーデンでは病院、クリニック、薬局、さらには患者さん自身がアクセス可能な形で電子カルテがデータセンターに蓄積され、それが共有化されています。このため、例えば地元のクリニックから大学病院に紹介されて行きますと、常に大学病院の医師はこの患者さんのデータを用意して待っていると言うことが可能になっています。このシステムについてわが国でも確立したいと、京大大学で進められています。

また、産業界に目を転じますと、工場の中には様々な生産機械があり、これを指令するためのコントローラーもある。こういった同士がお互い、その機械の中で使われている命令言語が違いますと、機械同士でコミュニケーションすることができません。これを工場内でスムーズに作業を進めるには非常に障害になる。これをユニバースにと言われる言語の変換読み取り機をスウェーデンメーカーが開発しています。そして世の中には様々なゲーム機が出回っています。その中には知的好奇心をあげるためのゲーム器もあり、日本の任天堂もそこに力を入れている。この知的ゲーム器の中にはキーモードで入力するにはまどろっこしくて面倒なものもある。これを解消するためのツールはペン入力とかがありますが、ここで裏に隠れているのは文字を認識するソフトフェアです。任天堂のゲーム器はこれを搭載し、スウェーデンメーカーも開発しています。つまりゲームを手書き入力ペンで楽しむことができるようになっています。もし、このスタイルがなかったら小さなキーボードを打ってゲームをやることになると、ゲーム自体の面白さは半減するのではないかと思います。

日本では電気メーター計測は計測員が各家庭を回り、数量メーターを計測、チェックしています。そしてその数字は請求書として送られるシステムになっています。これがスウェーデンの場合は、人が訪問してチェックするということはない。と、申しますのは、スマートメーターと呼んでいる通信機能を備えたメーターが各家庭に設置され、現在の設置普及率は100%。システムとしては自動的に消費した電気量を電気会社に送られ、そこで計算して消費料金をはじき出す。このスマートメーターは最近、さらに高機能化し、リアルタイムで各家庭にデータが送られるようになっています。それは一時間おきぐらいに現在の消費量を送れることが可能になり、このことはユーザーにとってもそれを把握することで節電意識が上がったと言う話を聞いています。

次に様々なリモコンについて。通常は赤外線を使用している物が多い。代表的なものはテレビのリモコン。このリモコンは人が前を遮ったりしますと、赤外線は作動しなくなり、それ自体が機能しないことになる。また、テレビ以外にもスピーカー、ヘッドホーンなどがファイアレスで繋がっている家電機器は赤外線が遮られるのと同じく機能しなくなります。そういったデメリットを持つこと無く開発したのがエリクソン。このようにもし、こう言った様々なICTの開発を行ってこなかったら、私たちの日常生活も違ったものになっていたのではないだろうかと考えまして、いくつかの例をお話しました。

ここからはスウェーデンのICTの現状について説明します。スウェーデンでは昔から今まで申し上げましたように、ICTという言葉がポピュラーに使われています。これに対し日本の場合はあまり使われてこなかったと感じています。この中で唯一、ICTはコミュニケーションと言うことを強く訴えてきた企業は日本電気だと思います。このNECが10数年前に標語として「コンピューター・ドコミケイション」がありましたが、まさにコンピューターを通信に有機的に結び付ける形でした。NECはこれを全面的に打ち出すことにより成長したのです。

さてスウェーデンのICTのレベルについていくつか紹介します。まずはカテゴリーとしての競争力について。スイスに次いで第2位。日本は6位。また、コンピューターまたはインターネット、高速用通信のブロードバンドの普及率について。特徴的なのは、今やコンピューターとインターネット、ブロードバンドの普及率は全部同じレベルに達している形になっていて、インターネットの普及率についても90 %と高い。そしてコンピューターを持っている人は全てがインターネットに接続し、かつ、その接続回線がブロードバンドであるという状況になっている。また、インターネットの接続を介して、いわゆるネットビジネスが盛んに行われています。小売業におけるネットビジネスは2012年の予測値は約365億円の売り上げ担っています。

次に携帯電話の普及率。高い国をみますと、ロシア、それ以外にサウジアラビア、アフリカの国などです。これはひとつには携帯電話以外の電話である固定電話の普及率が高くなかった国が爆発的に普及したというのが現状で、広大な国土や砂漠の国が該当します。次いで高い国のグループはスウェーデン、ノルウェーまたはヨーロッパの北半分が該当しますし、日本はそのランクからもう少し下がるレベル。世界でもっとも普及率が高い国はマカオで、206.3%。すなわち1人が必ず2台以上持っている数字。これに関連して普及率100%の国は94 カ国。ロシアの例だと、2010年時点で167%、サウジアラビア188%、リビア171%の数字。アメリカは90.2%、日本が94.7%です。このように携帯電話は世界中で普及していますが、最近のトレンドはスマートホンを利用したもの。つまり、必ずしもスマートホンではないが、ウェーブの利用ではスウェーデンが第1位になっています。

まとめとして、スウェーデンは情報通信に関して投資を行い、教育についても大学機関、無理由通機関などに様々なファンドを使ってサポートするスキームを準備してきました。また、それだけにとどまらず、ICTをいかに実用的な面で展開していくかにも力をいれています。最近のテーマとしてインターラプティブの言葉とデザインがあります。このICTを使い、いかに有効で活発な相互のコミュニケーションがとれるかに重点を置いて活動しています。デザインについては、ICTとは異なるもの、極端に言うと、芸術と融合させてどういう展開できるかといったことにも積極的に投資しているのです。このように、スウェーデンにはいくつもの研究開発する機関があり、経済産業省に類似する省庁傘下の各機関のイノテイブな分野に資金援助するファンドがあります。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2013年2月28日発行 ・・・ 所報No.358

第139回スウェーデン研究講座
「スウェーデンの参加型教育—その理念と実践報告」

北海道東海大学国際文化学部　川崎一彦教授と川崎ゼミ学生・佐々木友里、藤村一成、山口奈々

川崎教授の講演内容から

大学で到達目標としてきたのは「創造性」と「自己効力感」。この二つがキーワードで、手法としてはグローバル。この到達目標を設定した背景は、私のやり方は北海道の地域性を考慮したし、北海道でしかできなかったと考えている。それは北海道という特殊性ということ。ここではこれまでのプロジェクトの事例を紹介し、その後、ゼミ学生がどういう風に体験をしているかを話してもらうつもりです。

まず自己紹介から。妻はスウェーデン人で、子どもは息子と娘の二人。二人とも幼稚園から大学まではスウェーデンでお世話になり、今は二人、スウェーデン国内で仕事している。1988年に札幌に東海大学の国際文化学部が創設されて以来、24年間この札幌に住んでいる。もっともその間、ストックホルムと札幌を行ったり来たりの生活で、年に3カ月から4カ月間はストックホルムでの生活をしてきたが、2013年3月で定年になるので、5月からは生活の居をストックホルムに移して住む計画です。このことから、一言で言いますと、札幌とストックホルムの2カ所で定点観測していることになり、ストックホルムにいると日本にいると見えないことが見えてくる。逆に日本にいるとその立場が逆になり、そうした生活を15年間続けてきた。

今日のテーマは[北海道におけるスウェーデン。北欧との交流、大学生の力、地域活性化、創造性と自己効力感]をテーマに話をします。25年前に本日出席しておられる松前紀男先生（東海大学元学長、現在は同大副理事長、社団法人スウェーデン社会研究所名誉会長など・編集部付記）から「川崎さん、今は分からないと思いますが、大学教員というのは研究ではなしに、学生が育っていくのが一番楽しい」との話をお聞きした。教員と言うのは一般的には研究に非常に熱心で、研究の方が面白いタイプが多い。私もその例外ではなかったかもしれません。しかし、この松前先生の話は間違っていなかったという確信を今更ながらしている私です。

本日は研究にまつわることではなく、教育をめぐる話です。私は全ての担当科目で、創造性と自己効力感の二つを到達目標に設定している。その手法がグローバルに考えて、ローカルに行動してもらう。別の表現では「行動によって学ぶ」ということを授業の到達目標と手法にしています。皆さんは創造性については良くお分かりになると思いますが、自己効力感との言葉はあまりお聞きにならないかもしれません。そのための手法はグローバルに考えて、自分が住んでいる地域、または自分の出身地で行動することです。もちろん、グローバルと言っても非常に世界は広いので、私の場合は北欧の事例研究をして、それを参考にして地域で行動していくこと。これを学生の到達目標にしています。

創造性は皆さんお分かりだと思いますが、自己効力感は英語のself -efficacyの和訳。一言で言うと、自分でもできるという確信のこと。15年ほど教育について色々と考えているうちに、私はこの二つがキーワードと捉えるようになりました。あまり到達目標が多すぎても学生にとっては捉えにくい。二つなら、どんな授業にも捉えてもらえるかということです。

私はスウェーデンだけでなく、フィンランドの教育にも色々とヒントを得てきた。フィンランド教育のキーワードの一つが企業家精神。これは教育省の企業家精神教育の定義ですが、アイディアを行動に移す個人の能力。ここで要求さ

れていることはまず、アイディア。他の人が持たないアイディアや創造性が必要であるというのが1点目。2点目はそれを単なるアイディアに終わらせずに、それをアクション・行動に移す。この二つを企業化精神は要求しているわけで、先ほどの私の創造性と自己効力感と相通じるのかと思います。

まず創造性ですが、これは日本経済新聞の22年ほど前に掲載された記事からのです。写真は日本航空の入社式の様子です。会社側は「どういう服装で来なさい」と要求したことはない。皆さんは自分で好き勝手な格好をして臨んでくるのですが、この写真と別の写真（1986年）と比べてみると、26年前の方がはるかに個性的な服装になっています。2年前の写真はどうかといいますと、ネット情報や先輩からの話などから聞いたりしたのでしょう、スーツから、靴、髪型まで皆さんは似た格好です。こういう風に二枚の写真から言えるのは創造性の視点からみると、逆行しているのでして、私にしてみればショッキングな写真であった訳です。昭和の初期に詩人・金子みすずは「みんな違って、みんないい」という言葉を残していますが、この二枚の写真に照らし合わせてみると、「みんな同じでみんないい」という風に最近の若い人は考えているのかと不安になってしまう。こう考えるのは私1人ではないと思いますが・・・。

この写真は6年前にオープンしたスウェーデンの家具メーカー、イケアの1号店。オープンした時にイケアの社長はスウェーデンの新聞のインタビューに答えてこんなコメントを残しています。「社員にはイケアを自分での問題を解決することを要求する。いつもマニアルがあるとは限らない。日本人はそう考えていない人も多いようだ」。しかし、創造性を要求するのはイケアだけでないし、日本の企業がサバイバルするためにはそれが必要だというのが皆さんは感じられると思います。北海道の北の地域に道内でも一番人口が850人と少ない音威子府（おといねっぷ）村がある。この村はスウェーデンのレクサンド高校と姉妹校提携しています。村の高校生がこの地を訪れた時の印象を聞かせてもらったことがある。それはこういうものでした。「日本では周囲の目を気にしがちですが、スウェーデンの人々はみんな自分が着たいものを着て、自分が食べたい物を食べる。他人の目を気にせず、自分の好きな道を行く――そんな空気が流れています。周囲に流されず、自分をしっかり持つという点は見習いたいと思います」。これは日本人高校生の印象ですが、これとは別にこういう笑い話をお聞きになったことはあるかと思います。

地中海で豪華客船が難破し、限られた救命ボートしかない。しかも、この救命ボートに乗れるのは女性と子どもだけ。この船には各国からのツーリストが乗っているわけですが、男性は救命ボートを諦めて海に飛び込んでもらう事態になった時に、どう彼らを説得するかというジョークです。

まず、イギリス人には「あなたはジェントルマンですから飛び込んでください」と言うと、飛び込んでくれる。次にドイツ人。彼らには「これは船長の命令である」と言うと、そのとおりにする。イタリア人はどうかというと、「他に飛び込む人は誰もいません」と言えば飛び込んでくれる。アメリカ人には「最大限の保険が掛けてある」と言えばいい。日本人には［みなさんおそろいで飛び込んでください］と言えば、飛び込んでくれます。この小話は笑い話ではすまされない点があると私は思います。

後は手法についてですが、これには行動の大切さがある。私はlearning doing という言葉を使うのですが、これは大切だと考えています。今から言うことはアメリカの調査結果ですが、［何をおぼえているか］という調査データ。これによると、「読んだことは10%は覚えていない」。これが「聞いたこと」となると、覚えている率は20%に、［見たこと］となると30%。「見て、聞いたことなると、50%くらい覚えている。そして言ったことは80 %で、自分が「言って、したこと」ともなると90%は覚えているという、いわゆるlearning doing の効果がこの例でも立証されています。

このように、行動体験の大切さについて話しているわけですが、色んなところで色んな方から教わることがある。例えば、学生を様々な場所に連れて行きます。これはノルウェーを訪れた時にある中学校の校長先生から「感動」とは「感じて動く」と書く。「感じたら動け。感じるだけではダメ。行動しなさい」と。この時はちょうど、復活祭のさなかで、ヤコブの手紙を引用してこういう話をして頂いた訳です。しかし、行動の大切さを唱えるのは何もキリスト教だけではなく、仏典にも「口だけで真理をいう。悟った人間は心から真理を行う」と言うように、行動の大切さを謳っています。また、このほかに「完璧を目指すより、まず終わらせろ」とか、先生から幼稚園園長に転職し、再建した38歳の園長からは「まず行動という信条の実例を見聞できた。

このように、創造性と自己効力感を実行・行動することを私の授業の到達目標としているわけですが、なぜこの2点が大切かということを改めて紹介します。

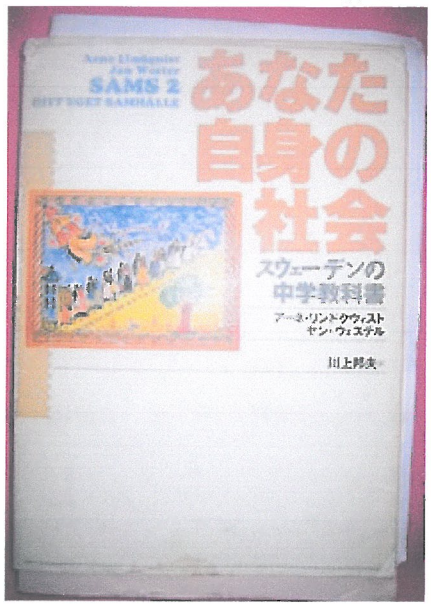
人類は狩猟の後、1万年の農耕文明を体験し、その後、200年前に産業革命が起こって、工業・物づくりの時代が始まった。日本はこれから100年後。私がストックホルムから札幌に赴任した24年前はまだバブル崩壊前でジャパンイズ№1と言われていた時代です。この№1であったのは工業・物づくりの時代で、その中でも自動車、家電といった一部の物が№1 であったかもしれません。しかし、その間に北欧を含めた先進国は知的産業に突入した。これが失われた20年または20年以上の原因ではないか。これは教育を含めて日本の社会システムにはこの知識・知的産業時代に対応できていない。これが日本のこんにちの問題の根源ではないかと思う。

それでは知的の時代の教育はどうあるべきかと言うことですが、創造性が何よりも大切。そして内容から方法、判断力、柔軟性、目的志向、そして一生学び続ける必要がある社会である――これが大切だと思います。私が企業家精神教育から学んだキーワードは、「教える教育から学ぶ教育へ」です。あるいは［内容よりも方法］がキーワードです。しかし、日本の教育は私自身が受けていた教育の問題点は創造性よりも内容の詰め込みをやってきた。他の人が考えた事の丸暗記は自分自身が思いつく創造性よりも大切であったということ。そして自分が判断するよりも丸暗

記で正解が必ずある。そしていかに早く辿りつくかの競争をしてきたわけです。高校から大学を卒業すると、そのあと勉強を続けるのは北欧諸国と比べると容易ではないという環境があったかと思います。これまでというのは「答え」は必ずあって、答えはひとつしかない。こういう時代であった。しかし、これからは答えがあるかどうか分からない。また、答えがあるとしてもひとつだけではないかもしれない。ますます問題を自分で見つけてくる必要がある時代であると言う認識です。

今年の八月末に出た中教審の大学教育答申の最初に、「これからの成熟社会において望まれる能力というのは答えのない問題に解答を見出していくための批判的、合理的な思考力などの認知的能力である」という書き方がされています。それがない時代というのは色んなところでお聞きになると思います。そもそもこういう問題は学校のテストには出ない。これはご存じのように無制限にあります。

例えば、「氷が溶けて水になる」――このように教わってきたが、北海道の小学生に聞くと、「氷が溶けて春になる」という答えが出るのはお聞きになったかと思います。これは果たして正解でないか、という問題ですね。落語に「学校で面白い回答をする生徒がいて、その子の親の顔をみたい」というのがあります。問題は、「本能寺を焼いたのは誰？」との質問に、「明智光秀」などと言われます。しかし、この親の顔をみたいと言われた件の生徒は、「私ではありません」と書いた。これは絶対に間違いのない正解ではないかと思います。同じ落語に「うし、馬、羊、ライオン、トラのうち仲間外れはどれという問いに、件の生徒は「仲間はずれは良くない」。これももちろん正解にはならなかったと思います。しかし、考えさせられる課題ではないかと思います。



あと皇太子殿下が読まれて感動したというのが「あなた自身の社会」。スウェーデンの中学校で使われている教科書です。この中にこういう課題があつた。第2章の「あなたと他の人々」の項目に「インドにおける恋愛と結婚」。

「インドを含めた多くの国では親が子どもの結婚相手を決めるのが普通です。親は、子どもが15歳になる前に結婚させます。親は適当な年齢の男子か女子かをもつ、同等のカーストの家族と結婚の契約を結びます。子どもたちが大人になると結婚します。この時、初めて顔を合わせることになります。インドでは、親も子供も、この形での結婚をきわめて当然のものとみなしています。一方スウェーデンには、この幼児結婚を批判する人が大勢います。では、インド人は私たちの結婚相手を自分で選ぶという制度をどう見ているでしょう」。

これに対し、南インド・マドラスの学校教員はこう答えています。「私は、どうしてあなたたちが、子どもの人生が偶然に任されることを受け入れられるのか理解できません。ディスコとかパーティでのたった一度の出会いが、全人生を決定してしまうのですよ。とても道理に叶っているとは思えません。スウェーデンの親には責任というものがないのですか。もし、子どもが結婚相手を見つけられない時はどうするのですか。親は何もしてやらないのですか」。

そして教科書は課題として、「愛情についてのインドの見方を、あなたはどう思いますか。インドの幼児結婚を弁護することができますか」とか、「私たちのやり方についてのインド人の意見、また、私たち自身の恋愛観について、あなたはどう思いますか」とある。

この事例を見た場合、これも間違いなく正解のない問題です、ね。こういうのがスウェーデンでは中学生用教科書で取り上げられているのです。また、書店でこんな本があったのでとりあげてみました。

「あなたは自分が利口だと思いますか」。これは英国・ケンブリッジ大学の入試問題。これ以外にも「あなたはクールですか」、「幸せとはどういうことですか」[コンピュータは良心がありますか」「私には考えがあるとあなたに思わせるものとは何ですか」。これら一連の問いは全て正解がない問題だと思います。河合隼雄という教育学者は、「教育」は漢字で[教」と「育」と書くわけで、「教える」と「育てる」の両面があるのに、日本には[教師」はいても「育師」がいないと。私自身もこれをひとつのヒントにして日々の教育活動に取り組んでいるところです。

さて、私が北海道で取り組んできたプロジェクトのいくつかを紹介したいが、このプロジェクトは北海道でしかできなかったという背景があります。大学のニーズ、地域のニーズ。北海道と言う環境が提供してくれた状況がある。私が所属している大学の座学からフィールドへ。これがキーワードになっている。なぜ、座学からフィールドが大切かと言うと、まず、実社会のニーズに触れる。それと第一次情報体験というインパクト。先生の話を聞いたり、本を読んだりするのは大切な情報ですが、自分自身の体験では外に出ると、自分自身が体験をする、そして情報を得る。この第一次情報のインパクトが大きなものがあります。それから「教える教育から「学ぶ教育へという視点からはフィールドに出るとそのインパクトが大きいという期待が大きい。それから北海道は日本の中でも地域活性化が必要とされている度合いが高い。そこでも学生がパワーを発揮していただく期待が大きいし、そのチャンスも多い。それと、北海道の

特殊な環境がある。私自身にも関連があるのですが、30余年、北方圏交流という、スウェーデンとか北欧との交流は日本でも活発な地域だったと思います。

二番目に道民性という特殊性。フロンティアスピリット。進取的、開放的、おおらか。それと北海道の女性の特徴としてあたらし物好き、行動力がある、物おじしない。まあ、例えてみればアメリカはカリフォルニアであり、オーストラリア。このため、私自身で言えばよそ者と感じたことは一度もありません。それと札幌の地は日本のテストマーケットと言われます。新商品のマーケッテイングを始める場合、札幌で売れたら全国で売れるだろうと。

取り組んできた数々の教育プロジェクト。それはスウェーデン、フィンランド、ノルウェーら欧諸国の学校との交流をはじめ、国内の大学同士によるフォーラム、自治体の活性化を図るシンポジュウム、民間企業のイケアインターンシップなど数々あります。こうした一連の活動の中で学生たちは通訳、企画作り、シンポジューム開催、ワールド・カフェ、また、公共・文化施設や民間施設を夜間開放してもらい、市民が地域の文化を楽しむ行事のカルチャーナイトのイベントに参加してもらい、さらには日本文化と北欧文化との交流を図っています。

この川崎教授の講演をうけて、3学生はプレゼンテーション。

自己紹介（名前、出身地）、大学を選択した理由、趣味を語った後、川崎ゼミでのフィールドワークの成果について次のように述べた。

「自信は自分で作る。経験がモノをいう。失敗を畏れない強さが必要。仲間は大切などを学び、今は自分というものに自信ができた。また、スウェーデンのレクサンド高校生との交流では、「自分たちの意見をもっていて、主張する。それに比べて自分が高校生の時はどうだったか」と反省を交えた回顧とともに、何事にも対処する「気持ちの変化としては、チャンスがくる→自分に出来るか不安→とりあえずやって見る→自分でもできた—という自己改革の喜びを述べた。このほか、イケアとのインターンシップ体験には「思いきったら即アウトプット。イメージを形にする。そして自ら動かなくては何事もできない。チャンスをつかむのは自分次第。そのためには好奇心や情熱を持つこと」とし、出会いは人を成長させてくれるし、自分を成長させてくれたと強調した。

この一連のプレゼンテーション後に参加者を対象にした行なわれた感想、疑問、質問点は下記の通り。
（川崎ゼミ寄稿。原文のまま）

・北の国から大きな力を発揮していますね。ぜひ広く発信してほしいです。
・プレゼンの中へ楽しく引き込まれていき、happyな気持ちになりました。若い方々に希望を持ちました。
・易しいようだけど重要なこと。素晴らしい！（学生、先生）
・頑張ってる学生さんがいると知り安心した。
・今日のお話を聞き、生き甲斐をみつけました。ありがとうございました。
・スウェーデンやフィンランド式の教育をするためには、そうした教育が出来る先生を育てる必要がある。児童・生徒を評価出来る認める能力と心の広さを持つ必要がある。教育はすべて自立活動に通じるべきである。
・楽しかったです。
・Good try
・初めて出会う方とこんなにいっぱいお話できたこと嬉しく思います。なかなか機会がありません。もう少し時間があったらと思いました。このままお別れするのは残念。
・学んだことをどう活かすのか。実社会で学んだことを活かせるのか
・学び方も大事ですが、体系的知識も大事と思います。今日プレゼンされた学生さんの専門が何なのか知りたかったです。専攻の学びにどう活かされているのでしょう？
・皆さんどんな勉強を大学でされているのでしょうか？
・大学では専門知識を得るために基礎的な画一教育は必要。その後大学院で独創性を育むべきと思います。（はじめからイベント企画屋になってはいけない）
・親も教員も〈育む力〉upが必要。社会全体で大人の質をupさせていかなければなりません。
・JALの入社式でみんな同じでいいという写真がショッキング。日本はおかしな方向に向っていないか。本質から大きくはずれているのかが心配。
・議論する時間がもう少し欲しかった。
・もう少し話し合いの時間がほしかってです。
・誰にも必要で大切なことを再認識することが出来ました。教育現場にも広げていって頂きたいと思います。
・“色”のある生活と教育、“人間らしさ”
・多様な意見が重要。　行動が必要。

・画一　→　多様　→　共鳴
・行動しよう。 ディベート能力を育てよう。
・Walk the talk!! 有言実行のみ
・大学生の皆さん、選挙で投票する自信ありますか。
・知識のみならず、行動面も教育していく必要があると思いました。
・気づき　今の教育について　先生の質が問題、先生は変われるのか。〈生きる力〉が備わるにはどんな教育。ツールに頼るのも大切だが、体験がツールに替わる。やはり小人数教育。
・気づき　指導者と学生の関係
・本質は何でしょう？を考える
・質問　参加型教育でアプローチされていましたが、どうファシリテートしていったのでしょうか？
・質問　川崎先生退任後、このゼミはどうなりますか？

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2013年2月28日発行 ・・・ 所報No.358

第140回スウェーデン社会研究講座
「スウェーデンデザインと日本文化の融合～私の生死を懸けた闘い」

(株)都倉インターナショナル　元代表取締役社長　都倉　亮

スウェーデンデザインをベースにした高級家具製作、輸入会社「都倉インターナショナル」の創立者、都倉亮さんは、簡素で機能美を特徴とするスウェーデン化デザインにいち早く注目し、日本への風土にマッチする家具を創作し、伝統に拘る閉鎖的な日本の家具市場に旋風を巻き起こしました。消費者が真から求めるものを天才的な嗅覚と美意識で商品化した家具は、スウェーデン文化と日本文化の融合の象徴として市場は大歓迎しました。都倉さんは、また、その頃、揺籃期だったネット販売にも注目、売上は増加の一途で、株式市場への上場も目前でした。ところが、その矢先、突然の中咽頭癌が左首リンパ節に転移したステージ4の進行癌が見つかり、終わりのない「癌との闘い」が始まります。この講演では「スウェーデンからスタートした上昇一途の家具事業」と「生死を分ける病魔」との壮絶なストーリーをお話下さいます。(講演案内文から)

展示会『スウェーデンと日本を繋ぐフラワーアレンジメント』
～落合邦子による着物文様とモダンカジュアルデザインの融合

私は慶応大学の後輩の落合さんから日本とスウェーデンの融合するフラワーアレンジを催したいと相談され、「それならスウェーデン、北欧のかけ橋になるならスウェーデン大使館を展示場にするのが理想的だ」と進言しました。しかし、大使館内展示は有名なアーティストが申し込んでもその趣旨などがマッチしなければ実現できません。そこで私がしたことは落合さんを紹介しただけ。最終的には大使館側が「落合さんのアートとアーチストして評価されて実現したのだと思います」。この陰にはスウェーデン社会研究所の瓦林理事長や須永所長の尽力もあったのだと思います。

さて私は1年半前は末期癌で1日の大半を天井見つめて過ごしていました。本日は私が現役の頃に展開していたスウェーデンのビジネスの話と末期癌の人間がどうして皆さんがたとお話をさせていただけるかを中心に致します。まずは簡単なプロフィール。1953年生まれ。1歳から7歳と10 歳から14歳までの11年間はスウェーデン駐在大使など外交官をしていた父の仕事でドイツなどで過ごした。ドイツではアメリカンスクールに通学したので日本語、ドイツ語、英語を同時に習得しました。日本に帰国して1年間の受験を経て慶応高校に進学し、慶応大学に。卒業後は三井物産に就職し、プラント輸出を13年間担当し、産油国をお客さんとして大型石油精製所、また石油化学などといった物を手掛けていました。この交渉で数千億円から大きいものだと1兆円を超す仕事でした。私はもともと頑強な人間ですが、今まで3回にわたって生死をさ迷う病気をした人間です。商社マン時代に海外出張から帰国してくも膜下出血などで今後はハードな仕事には無理が利かないと思い、退職し、その後に癌発症がありました。そして、ここにある本(致知出版社「諦めない生き方」)は、闘病記と人生観を綴ったものですが、父との交友があった聖路加病院の日野原先生の推薦もあって、6月に出版することができました。詳しく書いてありますので、ご興味があれば読んで頂きたいですが、「99%助からない、助かったとしても一生、植物人間と言われたのですが、御蔭さまで後遺症もなく命を取り留めました。

退職後を契機に独立、起業して21年半、この間、企業経営に携わってきましたが、20年目の9月、すなわち2008年の9月にステージ4の進行性癌が発見され、そこから私の癌との闘いが始まりました。それがこの本です。

私は独立して、まず、時は1989年のことですが、将来は「IT」の時代になる。この予感は商社マン時代から感じていたことですが、「1人1人がパソコンを使う時代になると言うことでITのビジネスを行うことでスタートしました。ちょうど、タイミング良く、キューバからアメリカに亡命してきたある天才数学者が開発した会計ソフトに出逢った。私はたまたまこの数学者から好かれまして、「このソフトをどうか日本で広めて欲しい」と頼まれました。これは天から降ってきたような話で、販売には私と同世代で、今はその分野でときめくソフトバンクの孫さんに売って頂く段取りを持っていました。

ただ、孫さんに売って頂く前にこのコンピューターソフトを日本語に翻訳するには改めて日本のソフト会社に頼まなければならない。そして最終的には孫さんの所で販売して頂いた経緯がありますが、その翻訳する過程において、私はどちらかと言うと紹介しただけで、実際のコミニ―ケイションは日本のソフト会社とおおもとのアメリカの会社とのやり取りになり、私は「蚊帳の外」になってしまう訳でした。それを見かねたアメリカ側の会社社長は「この翻訳仕事はあなたの会社でできませんか」と助言を頂いた。しかし、当時の私は資金もなく、それは叶いませんでした。結局、私はその権利を譲り、何時の日にかまたIT業界に戻ってくると思いつつ、いったん、このITビジネスから撤退しました。

時を同じくして先ほどちょっとお話申し上げましたが、私の父はスウェーデン大使を退官した後も日本、スウェーデン及び日本・スカンジナビア諸国との色んな財団の理事長などをしたりしていました。当時の日本は、スカンジナビア諸国に対し、圧倒的に輸出過多だったため、各国大使館からは「何とか輸入を増やしてほしい」という要請がありました。これに対し、父は私に対し、「スウェーデンからの輸入を増やすことはお前の会社でできないのか」と言われました。そこで私は鋭意、検討し、ひとつは食品、ひとつはアパレル、もうひとつはインテリアに絞りこみました。ところが食品と言うのは特別な冷凍・冷蔵庫などが完備していないとなかなか難しい。アパレルに関しても当時はフランス、イタリア、イギリス、アメリカがあり、今でこそ、H＆Mみたいなカジュアルウェアが日本に進出してきていますが、当時はスウェーデン、および北欧の家具といったら、冬場の特殊的な物しか認知されていなかった。

そこでインテリアを検討してみたら、時を同じくしてスウェーデン大使館側から「日本の大手住宅メーカーがスウェーデンの技術、材料、人によって作られた家具を装備したい」とのサポートとの話がありました。この時、私のインテリアの知識はほんの1、2程度のものでしたが、「ぜひとも私にやらしてください」と該当するスウェーデン会社を調べました。この結果、この条件に当てはまる会社がスウェーデンの南に位置する町にあったのでそのことを会社にコンタクトをとったら、「当社でやらして下さい」という快諾がありました。私はこの話を日本国内の上場企業で、業界第二の某メーカーの社長に話したところ、「直ぐに試作品を作ってもらうようにお願いします」とのことでした。やがて「試作品ができた」との連絡を受け、現地に出向く話になりました。

私はてっきり、スタッフら何人かと一緒に行くのかと思ったら、なんと社長と私の2人旅とのことでした。そして私たちが現地に行くと、この某社からの毎日電話があって、「社長のスケジュールを教えて欲しいとの出張スタイルでした。この商談ですが、当時、日本のデザインはプリント模様仕立てで、スウェーデン物は本物を使った家具でしたから、この社長はべた惚れし、一定の長期契約を進めて欲しいとの要望がありました。次は実際の輸入を進める前に実務部隊が現地に出張ということになり、今度もまた私が技術説明者、営業責任者ら数名とともに現地の工場を訪れました。

朝、その商品を見せてもらったら、営業責任者は開口一番、「こりゃ、アカン」。また、技術責任者は「技術的には良いものですね」と二つの矛盾した話をし、くだんの営業マンは「これは売れんわ」と。現地の社長はこの人たちは何を言っているのか」と尋ねます。それをそのまま訳すと話がややこしくなるということで、私は2人に対し、「違うことをお話になっていますが、何か問題なのですか。技術的にはすばらしいと言って、片方では売れないとは」と聞き正しましたところ、2人は「技術的には最高。ただ、ドアの右側と左のドアの左右対称の木目には差がある」と言うことでした。つまり、この「差」が問題になっていたのです。この経緯を現地の社長に通訳したところ、社長は笑顔で、「よくぞ言ってくれました。これこそ本物を作っている証明に他なりません」と答えてくれました。左右のデザインをぴたりと対称に作るのはプリントでしたら簡単にいくらでもできます。しかし、この微妙な差が本物の証で、現在なら目の肥えた人たちならご理解できるのですが、当時はそうではなかった。私は「本物の良さを伝えるのもあなたたちのメーカーの仕事で、消費者に伝える責任もあるのではないですか」と色々な話をしました。しかし、営業の責任者は「採用できない」と言い、社長にこのことを伝えると困惑している。そこで私は営業責任者らに言いました。私にしてみれば、「日本側の社長が試作品を作ってくださいと契約書を交わし、生産に入りました。それをスタッフは社長が何を言おうがこれを採用できないと言うが、こうしたビジネススタイルは欧米ではあり得ない」と。そして私は両者の間に割って入り、日本側の人たちにこう説明しました。

「あなた方が普通に下請け側と商談を進めているのとはわけが違う。もともと、御社の社長がスウェーデン大使館に依頼し、なおかつ、現地に出向き、気にいられて長期契約を結んだ話です。それを採用できないと言う。これは契約不履行になり、これだと実際に買う以上のものを支払わなければなりません。もうひとつはそれ以上に、日本とスウェーデンの友好関係にひびが入ります」と言いました。そこまで言いますと、相手もサラリーマンですから、苦々しい顔をしながら「分かりました」と言い、輸入は再開され、日本に入ってきました。ところが、営業責任者がこんな意向です

から、担当者たちも商社への本物の良さの説明をするよりも、手間がはぶけるカタログ販売におかれ、残念ながら一部の本物志向の人に評価されたものの契約年数がきた段階でエンドになってしまいました。

このことで私は色々ノ事を学びました。この問題はどちらかが悪いと言った問題でなく、「感性の違い」が生じたもの。この違いは誰が決めるのか。両方の文化の違いを理解している人間にしか言えないのではないか。さらに「これはひょっとしたら、とてつもないビジネスチャンスになるのではないかと思いました。ただ、この失敗例があるものですから、事業の展開に当たっては「これをコンセプトにしてみよう」と、まずはコンセプト作りから始めました。目指した世界はヨーロッパのモダンカジアル家具についてオリジナルを損なうことなく、日本の居住空間やライフスタイルに合うように、デザインから生産、輸入・販売することをキィーポイントにしました。

当時、双方向と言うことがはやっていましたが、私も将来、会社に行くよりも自宅で仕事をする人間が増える時代になると思っていました。この場合、双方向の仕事となると、自宅で仕事をする人はオフィス家具を置くと、生活はどうなるか。それにはおしゃれな暮らしができるスウェーデンデザインなどを考慮した、かつ、売り手の論理でなく、買手の論理に立った商品サービスのマーケットであるべきと思いました。そのマーケットについては4つに区分できる。

Aマーケット　価格が高く、なおかつ機能性、ファッション性を重視する。どういう物か。それは一流デザイナーがデザインした物。あとはブランド品。Bマーケット　価格が高くて、デザイン性、ファッション性は追究しない家具であればアンティーク。また、匠の技で造った物。Cマーケット　デザイン、機能、ファッション性を重視しない。量販売店で売られている物。Dマーケット　デザイン、機能、ファッション性を重視し、なおかつ価格が低い。これは夢のマーケットで、実際は無い。

私の戦略はどこをターゲットにするか。つまり、デザイン、機能、ファッションを重視して、なおかつ、手の届く値段だったら欲しいというマーケット。ではどういう人がいるのか。年代的には20歳代から40歳代。この年代層はどういう空間に住んでいるのか。マックス80平方㍍、小さければワンルーム。また、80平方㍍のファミリータイプといっても大きな応接間があるわけではないし、ひとつひとつの部屋で言えば、ワンルームマンションの組み合わせ。ですから、私の結論は、「六畳ひと間で豊かな暮らしをする。必要な時に必要な機能を発揮して、そうでなければ空間を有効利用できる家具を開発すれば、われわれのマーケットになる」とし、商品作りに取り組みました。

この中にはイスや床にも利用できるソファベット、インテリアを兼ねた棚などヒット商品が生まれ、各種のデザイン賞をいただきました。また、店舗販売とともにインターネットによる直販で販路も広がり、これは在庫の必要もない手法で、これらの成果から株式上場の基盤づくりができると確信しました。

その矢先の癌の発症でした。手術はせずに、化学療法で2カ月間の過酷な治療結果でともかくも退院することができました。2008年夏のことでした。しかし、融資関係で私の症状を懸念する動きもあり、結局、「今のうちに会社を処分する」と決断、2010年5月に清算、解散しました。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2013年2月28日発行 ・・・ 所報No.358

スウェーデン留学体験シリーズ　アンケートから（最終回）Tさん

（2010年4月アンケート記入）

留学先　学校名：ストックホルム大学

専攻：文学　**課程・留学形態**：学士、私費留学　**留学期間**：2004年8月～2008年10月

留学の動機　なぜスウェーデンに留学しようと思いましたか？なぜ他の欧州・北欧諸国ではなくスウェーデンを選びましたか？
子供のときにスウェーデンの児童文学作家の本を読んでおり、そこからスウェーデンや文学に興味を持つようになったため

留学前の準備期間　留学を思い立ってから実際に現地へ出発するまで、どのくらいの準備期間が必要でしたか？
留学は子供の頃から希望として頭の中にあったので、それを入れると長い期間になりますが、実質の準備期間は2年ぐらいです

スウェーデン語や英語の勉強方法　日本またはスウェーデンで、語学をどのように勉強しましたか？
大学2年生（日本で）のころから、週に1回程度、スウェーデン語の語学教室に通っていました。また、日本の大学在学中に2回、長期休暇を利用して3週間ずつストックホルムに行き、スウェーデン語の集中講座に参加しました。そこで基礎文法は学びました。一番力がついたのは、基礎の文法をふまえた状態で、日本の大学の卒論作成時に辞書と首っ引きでスウェーデン語の文献を読んだこと、また、NHKの国際ラジオ放送のスウェーデン語放送でアルバイトをして、様々なニュース原稿を読んだことが大きかったと思います

TISUS（大学入学のためのスウェーデン語試験）を受験したことはありますか？
ストックホルム大学の北欧言語学科のコースを修了するとTISUSと同じ資格が得られるのでそのコースをとり、修了試験を受けました。試験形態・内容はTISUSと同じです。

情報収集方法　どのようにして情報を集めましたか？
ストックホルム大学のホームページで情報収集し、わからないことは直接メールで問い合わせました

現地の学校への問い合わせ　学校へはどのような方法で連絡を取りましたか？またどのような質問をしましたか？
メールです。応募方法や時期、条件等について問い合わせました。留学できることが決定してからも、部屋探し等に関して問い合わせをしましたが、担当者が夏休みに入ってしまったときは全く話が進まず困りました。代理の人もいましたが、担当者が戻ってくるまで対応できないと言われました。

出願　どのような書類（芸術系の場合は作品）をどこに提出しましたか？
北欧言語学科の担当者に、願書と、大学ゼミの先生に書いていただいた推薦状を提出しました。

書類（作品）を提出する際に苦労した点はありますか？
特にありませんでした。

出願から正式な入学許可書を受け取るまで、どのくらい時間がかかりましたか？
願書の雛形をメール添付で送ってもらったかHPからダウンロードするかして、記入し、郵送しました。出願から受け入

れ許可が出るまでは、2ヶ月くらいかかったと思います

入学試験　現地で入学試験や面接を受けましたか？
はじめはSvenska Behörighet（TISUS資格と同等のスウェーデン語に関する入学資格）を得るための北欧言語学科のスウェーデン語コースに応募したので、クラス振り分けの語学試験を受けました。1時間程度の試験で、文法問題と作文があったと思います

居住許可の取得　どのような方法で取得しましたか？
入国前に、大学から受入許可の書類が出た時点で、受入許可を得た期間（2学期）のスチューデントビザを在日大使館で申請しました。スウェーデンに渡ってからは、新しい学期の受入が決まるたびビザを更新していたので、半年ごとに申請しました。
日本での申請時は、申請書と一緒に現地の学校のアクセプションレター（受入許可書）と、滞在期間中に必要な金額を満たした銀行の残高証明を提出したと思います。
スウェーデンでの申請時も、申請書、学校からの受け入れ承諾書、残高証明もしくは自国から定期的に送金があるということを証明する書類の提出を求められました。

保険　どのような保険に入っていましたか？
はじめは日本の保険会社が留学生向けに出している保険に入っていました。（保険料は覚えていません）。滞在が1年を過ぎ、パーソナルナンバー（社会保険番号に相当する個人登録番号）をもらってスウェーデンの医療制度に加入してからは、日本での保険には入っていませんでした。

学校生活　日本の学校（大学）の授業と比べて異なる点や、スウェーデンの特色を教えて下さい。
さほど違いはありませんが、グループワークは非常に多く、グループ単位でのレポートの提出や発表はしょっちゅうでした

授業の準備はどのようにしましたか？予習・復習にどの程度時間をかけましたか？また日本で身につけた語学力で十分でしたか？
毎回、先生から次回までに読んでくるページを指定されるので、それを読むことに努めました。文学部ということもあり量が多く、読みきれたことはなかったと思います。
日本で学んだ語学力は全く充分ではありませんでした。北欧言語学科に入った際も、明らかにまわりよりレベルが低く、初めは辛い思いをしました。学部に入ってからも、厳しい時は多々ありました。

英語の授業プログラム（International Programme）に参加する場合でも、スウェーデン語は授業やリサーチ、日常生活において必要でしたか？
英語のプログラムには参加していません。

授業以外に勉強する際、どのような場所を利用しましたか？学校の施設（図書館、コンピュータールーム、カフェテリアなど）は充実していましたか？
自室、学校の図書館、市立図書館、カフェなどで勉強していました。学校の施設は十分に整っていました。コンピューターの数も多かったです。食堂やカフェ、売店もたくさんありました。

試験はどのように実施されましたか？また試験対策はどのようにしましたか？
文学部では、1学期あたり4回程度試験があったと思います。レポート提出が主なので、テキストや参考文献を読んでレポートを書き、期日までに提出します。提出前には、必ずスウェーデン人の友人などにスウェーデン語のチェックをしてもらうようにしました。課題がいまいち掴みきれない時など、先生に質問したり、クラスメイトと課題について話し合うことによって設問自体への理解を深めるようにしました

プレゼンテーションやレポート（エッセイ）作成に際して、大学による語学サポートなどはありましたか？またスウェーデン独特の書き方やフォームはありましたか？
そういうサポートがあるということは聞きましたが、利用したことはありませんでした。表紙の作成法等に決まりがあります。北欧言語学科でスウェーデン語を学んでいた際にそういったクラスもあったので、そこで学びました。また、アカデミックライティングに関する本を一冊購入し、参照しました。

学校全体やクラスにおける留学生や日本人の割合、また年齢層はいかがでしたか？

いわゆる「留学生」はいませんでした。高校時代に他の国から引っ越してきて、母国語はスウェーデン語ではないという学生なら2～3人いました

クラス以外の活動（クラブ、サークルなど）に参加しましたか？
スウェーデンではいわゆるサークル活動はありません。ボランティアやワークショップには参加したことはありません

現地の学生とどのように交流を深めましたか？大変だった点はありましたか？
学生アパートの同じフロアでキッチンを共有していた学生たちとは良い友達になりました。また、グループワークを通じて友達になったケースもあります。特に大変なことはなかったと思います。ただ、スウェーデン人は比較的オープンではないため、友達づくりが簡単という感じはしませんでした

日本からの留学生とどのように接していましたか？
特に大変だったことはありません。お互い現地で出来た友人を紹介しあって一緒にパーティなどを開いていました。日本語で話したくなった時などに話したりすることができて、支えてもらうことも多かったです

他国の留学生とどのように接していましたか？また、指導教官とのやり取りで大変だった点はありましたか？
他国の留学生とは、学生アパートで交流する機会が多くありました。留学している者同士ならではの話や相談ができて、非常に助かりました。指導教官とのやりとりでは、特に大変なことはなかったと思います。親切な先生も冷たい先生もいますが、それは特に日本と変わりません。

日本で得た情報と異なっていた点はありましたか？
特にありません

住居　留学期間中の住まいをどのように探し、どこに住みましたか？
学生用アパートです。留学中はそこにずっと住んでいました。たいてい、皆SSSB（ストックホルム学生住居協会）という学生を対象とした学生アパートの斡旋業者を通して探していたと思います

トラブルはありましたか？その場合、どのように対処しましたか？
週代わりでゴミ捨てや掃除の担当を決めていましたが、きちんとやる人とやらない人の差はあったものの、トラブルというほどではなかったです

気候　気候の違い（気温や日照時間）に対して心がけた点を教えてください。
特別な準備等は特にありません。天気が悪いことを辛いという方はたくさんいたと思います。天気が悪い日には無理をして外に出ず、家で居心地よく過ごすことに努めていたと思います

現地の食事事情　普段はどのように食事をしましたか？現地の食事や食材で苦労したことはありますか？また日本の食材は手に入りましたか？
自炊していました。日本食材を売るお店が何軒かあったので、特別なものがほしいときにはそういった店に行きました

留学費用、送金・管理方法など　学費や諸経費はいくらでしたか？
学費は無料でしたが、スチューデントユニオン（学生組合）には学期毎に200～300クローナ払わなければなりませんでした。支払は現地銀行の口座からネットバンキングで支払いました

学費以外の生活費（家賃、食費、光熱費など）はどのくらいでしたか？
1月あたり6,000～7,000クローナ程度の予算で過ごしていました

お金をどのように管理していましたか？日本から送金をしましたか？
日本から送金を受ける際は、シティバンクの口座を使っていました。それとは別に現地銀行の口座を作り、現地でのバイト代はそこに入金してもらっていました

医療　現地で受診したことはありますか？大学内で医療サービスを受けることはできますか？
病気や怪我等でかかったことはありませんが、女性向けの定期健診のようなものに呼ばれるのでそれには行きました。大学内でも医務室はありましたが有料です

現地での各種相談先　相談先は事前に知っていましたか？学校の内外で問題があったとき、誰に相談しましたか？また家探しに対する支援はありましたか？
質問などがあるときは、とりあえず総合受付の窓口のようなところに行って、どこに行けばいいか尋ねました。住居の支援を受けられる自治体などはなかったと思います

治安　現地の情報をどのように集めましたか？注意した点はありますか？
特に収集はしませんでした。現地でも特別な防犯対策のようなものはしていませんでしたが、深夜はできるだけ1人で出歩かないというような、日本にいる時と同程度のことは気をつけていました。犯罪に巻き込まれたことはありません

通信関連　パソコンや携帯電話、インターネットを現地でどのように利用しましたか？また、日本からパソコンを持参しましたか？
パソコンは日本から持参しました。インターネットは接続費がすでに家賃に含まれていました。携帯は現地で購入しました

帰国後の進路　現在の所属を教えて下さい。
（株）日本スウェーデン福祉研究所という会社に勤めています。

あなたの留学経験は、現在の仕事や学業にどのように活かされていますか？
仕事では主に語学の面で活かされています（スウェーデン語と英語）

後輩へのアドバイス　留学生活を振り返って、「日本にいる間にしておけば良かった」と思うことはありますか？
やはり、語学の勉強はしておけばしておくほど現地に行った際に楽だと思います

これから留学を考えている方々へアドバイスをお願いします
自分が真摯な気持ちで選択したのなら、その選択に自信を持つこと、自信を持つためには成果や結果を自分に経験させることが必要であること、結果を出すためには努力が必要なこと、努力し、それを継続するためには、自分の努力や能力を自分で認めてあげることが必要なこと。そういったことが大事だと思います
（編集部から。今回で留学生アンケートは終了しました）

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

社団法人　スウェーデン社会研究所

平成２３年度　理事会・通常総会

日時　：平成２４年６月１４日（火）午後６時―８時
場所　：スウェーデン大使館　アルフレッド・ノーベルオーディトリウム

議　事　次　第

- 理事会成立宣言
- 理事会終了
- 総会成立宣言と議長選出
- 理事長挨拶
- 出席者自己紹介
- 議題

第１号議案　平成23年度事業報告と決算報告――――――――――――２

第２号議案　平成24年度事業計画と予算――――――――――――――６

第３号議案　会員動向――――――――――――――――――――――１５

第４号議案　役員人事――――――――――――――――――――――１７

第５号議案　その他

１．　会員の意見・提案
２．　事務局からの提案
　　－スウェーデン語教室の有効活用
　　－公益法人改革の進捗状況
３．　議事録署名の承認

平成２３年度　理事会・通常総会

出　席　者　名　簿

［出席者］　３１名（含む事務局１）　（順不同・敬称略）

理　事　　瓦林聖児、野崎俊一、松前紀男、都倉　亮、池田冨士太、波多野　裕、池田研二、遠藤　勲、ホーヌマルク紀子、須永昌博、
顧　問　　原　禮之助、
監　事　　藤井統司、
会　員　　今里悠一、萩原宏人（法人）、藤代洋行、関谷和子、高田知樹、宮杉　武、坂田　仁、鎌倉和子、大内一也、橋本久子、荒井　洌、小針健太郎、丸山美根子、村田佳壽子、小林美賀子、増田明男、太田しおり、山下英明、
事務局　　須永洋子、

［委任状提出］

役員　　：　５名（含む監査１、評議員１、顧問１）
法人会員　：　４名
個人会員　：１１３名
学生会員　：　１０名
総計　　：１３２名

合　計　総会　１６２名、理事会　１５名　（最小有効定数　１１８総会名、８理事会名）
（社）スウェーデン社会研究所定款第４章２５条及び34条：
「総会は**会員の過半数**の出席がなければ開会することができない」
「理事会は理事の**過半数**の出席がなければ開会することが出来ない」

平成２３年度末現在の役員・会員総数
（昨年度）

役員	：　１８名	（１８名）
法人会員	：　６社	（６社）
個人会員	：１８９名	（１６１名）
学生会員	：　２１名	（１７名）
総計	：２３４名	（２０２名）

第１号議

案

（社）スウェーデン社会研究所
平成２３年度　事業報告

１・スウェーデン研究講座　：１６回開催

場所　　スウェーデン大使館オーディトリウム
時間　　原則毎月月末　１８:００－２０：００
懇親会　　講演終了後、講師を囲む懇親会
参加者　　平均　９０人/回　延べ約１４００名
ビデオ放映　　公益財団法人　ハイライフ研究所

回	年・月	演　　題	講　　師
108	2011.04	Swedish politics and politicians ~ Compared with Japanese	Mr. Seiji Kawarabayashi President, The Japan Institute of Scandinavian Studies
109	2011.05	● Nuclear Policy after Fukushima in Sweden ● Film [Into Eternity] ● Swedish views for Fukushima accident	● Swedish Ambassador, Stefan Noreen ● Science and Technology Counsellor, Anders Karlsson ● President of Studsvik Japan, Toshio Yamazaki
110	2011.06	Enjoy Scandinavian Films	Ms. Yoshiko Watanabe, Journalist and Movie critic
111	2011.07	Risk Managements in Sweden ~through my experiences	Ms. Emiko Tamura Former Science Attaché, Swedish Embassy
121	2011.08	Food safety in Sweden and Japan ~ Radioactive contamination	Mr. Martin Frid Adviser for the Consumer Union Japan
122	2011.09	Can we survive without nuclear power ? ~Verification in Sweden	Mr. Peo Ekberg, President of OneWorld Eco-lifestyle consultant
123	2011.10	Electric power market mechanism in Sweden	Mr. Yoshimune Sato Gothenburg University
124	2011.10	Constructing Sustainable society with or without nuclear power	Ms. Lena Lindahl Representative, Sustainable Development Association of Japan
Spec ial	2011.11	What is SAMHAL ? Big company hiring 22,000 handicapped workers in Sweden	Mr. Hiroshi Nishino, Proceed Mr. Gustav Strandel, Maihama Club Ms. Lena Lindahl, Sustainable Association Mr. Akihiro Sunaga, JISS
125	2011.11	Sweden Week hosted by Tokyo Institute of Technology and arranged by JISS	Consecutive lectures for 5 days from Nov.21 to 25 with different subjects by respective speakers, One example :
		Industrial corporations in Sweden~ global activities and CSR	Mr. Sven Eriksson, Vice President, Ericsson Japan, Mr. Thomas Osterberg, President, Atlas Copco Mr. Hiroshi Nishino, Samhal representative

			Mr. Akihiro Sunaga, JISS
126	2011.12	Sweden's International Cooperation in Environmental issues – From Baltic Sea Countries to Asian regions	Prof. Masazumi Ao, Yokohama City University
127	2012.01	Tough country Sweden-its society and life	Mr. Yoshiki Watanabe, Japanese ambassador to Sweden
128	2012.01	We can survive without nuclear power	Dr. Goran Bryntse, REPAP project coordinator Ms. Lena Lindahl, Sustainable Sweden Association in Japan
129	2012.02	Citizen's participation in politics in Sweden	Dr. LeGrand Tsukaguchi Toshiko Nordic Publishing Inc.
130	2012.02	Comparative studies based on international data reference between Sweden and Japan	Prof. Kenji Suzuki, International Japan Culture, Meiji University
131	2012.03	Inside and outside stories about Nobel Prize	Mr. Toshio Kitao Former representative Sumitomo Shoji, Stockholm office

Shadowed：Energy and Nuclear Power in Sweden in view of Fukushima Daiichi disasters.

２．スウェーデン語講座

講師　　：速水　望
副講師　：ヘンリック・ヴレーテンフェルト（スウェーデンヨッテボリ商科大学）
場所：ＪＩＳＳスウェーデン語教室　六本木サクセスビル３Ｆ
授業日：毎週　月曜、水曜、木曜、土曜日

- 授業内容：基礎文法、会話、読解、通信講座

春学期　４月　２日 ―　６月 14 日　　39 人
夏学期　７月　２日 ―　９月 13 日　　37 人
秋学期　10 月　１日 ―　12 月 22 日　　45 人
冬学期　１月　５日 ―　３月 26 日　　37 人
合計延受講者　158 人（昨年 168 名）

- 平成 24 年２月 19 日：SWEDEX スウェーデン語資格試験　第１回開催

３．所報発行　３５０号―３５３号　４回　（野崎理事担当）

４．講演

（１）４月：渋谷アップリンク「10 万年後の安全」
（２）５月：明治大学日本国際文化学部「スウェーデンの社会システム」

（３）11 月：東京工業大学「スウェーデンウイーク」
（４）11 月：ノーマライゼーション推進協議会「サムハルと身障者雇用」
（５）12 月：いわき市「スウェーデンの環境とエネルギー」
（６）２月：ワレニウス社内研修「スウェーデンとノルウェーの企業活動」

５．外部組織への協力

（１）４月：SVT(スウェーデン国営テレビ）福島被災地、南相馬市、飯館村　取材
（２）５月：スウェーデン大使館「留学フェア」
（３）８月：ＮＰＯ法人　Bmap [10 万年後の安全」聾唖者向けバージョン
（４）９月：北海道当別市とレクサンド市との交流に際して
（５）９月：関西生産性本部、スウェーデン訪問のプログラムアレンジ
（６）10 月：チャルマース工科大学 IMOP in Nagoya
（７）11 月：東京工業大学「スウェーデンウイーク」全体プログラムアレンジ
（８）２月：SVT(スウェーデン国営テレビ）福島・宮城取材ー復興状況と除染作業
（９）３月：チャルマース工科大学 IMOP in Gifu

６．マスコミ取材

（１）４月：北欧楽会　年報「スウェーデンから見た日本：海王丸」
（２）５月：フジテレビ「日本と世界のランキング」
（３）５月：東京新聞「10 万年後の安全」
（４）７月：日本経済新聞「スウェーデンのエネルギー」
（５）７月：日本放送「スウェーデンと日本の女子サッカー対決に際して」
（６）10 月：いわき市いわきリード「クリーン社会の構築」
（７）３月：シルバーストーン発行「Excellent Sweden-Caring 14 号」

７．情報提供

会員、学生、教授、研究者、一般人、マスコミからの問合せに対する情報提供とアドバイス

（１）スウェーデン留学関係
（２）スウェーデン語文献の翻訳
（３）スウェーデンの文献調査関係
（４）スウェーデンの家族、福祉、医療関係及びスウェーデンの一般事項
（５）ハイライフ研究所のホームページによるブロードバンド放映の紹介と行事・新刊案内

８．情報再配信

スウェーデン大使館、スカンジナビア政府観光局、レナ・リンダール、アクアビット、ステンハンメル協会、ニッケルハルパ協会他、スウェーデンに関係する機関が開催する行事の再配信

９．会合とパーティ（ＪＩＳＳ主催のみ、招待出席は除く）

（１）平成２３年６月１７日　平成２２年度総会・理事会
（２）平成２３年８月２０日　スウェーデン語ザリガニパーティ
（３）平成２３年12月３日　スウェーデン語講座受講者クリスマスパーティ
（４）平成２４年２月１日　ノルディック出版「スウェーデン関係４冊発刊」パーティ

以上

平成２３年度（４４期）

決　算　報　告　書

自　平成２３年 ４月　１日　至　平成２４年　３月３１日

社団法人　スウェーデン社会研究所
東京都港区浜松町１－８－１

平成23年度収支計算書

自平成23年4月1日
至平成24年3月31日
（単位　円）

支出の部		収入の部	
費　目	金　額	費　目	金額
（管理費）		（管理収入）	
1. 給料手当　（臨時雇賃金）	2,232,000	雑収入	5,704
2. 通信費	274,079		
3. 事務費	84,209		
4. 事務所費	240,000		
5. 租税公課	70,000		
6. 雑費　（振込手数料）	15,330		
7. 交通費	20,710		
8. 会議費　（総会会場費）	25,000		
小計（A）	2,962,173	小計（A）	5,704
（事業費）		（事業収入）	
1. 講演会：スウェーデン研究講座	1,070,644	1. 会費	2,421,000
講師謝金	(429,000)	個人会費	(1,981,000)
会議費（講師食事、2月1日　パーティ）	(222,404)	学生会費	(80,000)
会場使用費	(400,000)	法人会費	(360,000)
交通費　（受付手伝い）	(19,240)	2. 講演会	784,410
2. 講習会：スウェーデン語講座	5,908,980	3. 講習会	5,450,700
講師謝金	(3,553,200)	SWEDEX　受験料	139,000
交通費（講師）	(344,000)	4. 委託事業（東工大）	150,000
業務委託費（教室管理 by 講師）	(765,000)	5. 雑収入	10,860
不動産賃借料　（サクセスビル 303 号）	(1,180,039)		
事務費（教材コピー）	(40,941)		
雑損（授業料返金）	(25,800)		
3. 調査費（所報）	80,000		
出版費（所報コピー）	8,250		
4. 通信費（HPメンテナンス）	155,830		
5. 書籍	15,110		
6. 委託事業費（東工大）	135,000		
7. 雑費	8350		
小計（B）	7,382,164	小計（B）	8,958,970

合計(A+B)	10,344,337	合計(A＋B)	8,964,674
当期収支差額	△1,379,663		
次期繰越	13,918,316	前期繰越	15,297,979
計	24,262,653	計	24,262,653

自平成 23 年 4 月1日
至平成 24 年 3 月 31 日

平成 23 年度貸借対照表

（単位　円）

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
（流動資産）		（流動負債）	
現金預金	14,229,316		
未収金	500,000		
（法人会費）	(180,000)		
（個人会費）	(320,000)		
（固定資産）		（正味資産）	
備品	100,000	基金	1,000,000
敷金	89,000	次期繰越金	13,918,316
計	14,918,316	計	14,918,316

平成 23 年度財産目録

平成 24 年 3 月 31 日現在
（単位　円）

手持ち現金		△15,551
普通預金	三菱東京 UFJ 銀行	732,757
普通預金	三井住友銀行	503,147
定期預金	三菱東京 UFJ 銀行	8,008,963
定期預金	三井住友銀行	5,000,000
計		14,229,316

備　品　台　帳

平成 24 年 3 月 31 日現在

品目	個数	購入時期
NEC ラップトップコンピューター	2 台	2004 年 4 月、2005 年 7 月
キャノンプリンター	1 台	2005 年 7 月
パナソニックファックス	1 台	2005 年 7 月
キャノンスキャナー	1 台	2005 年 6 月
コニカデジタルカメラ	1 台	2002 年 4 月
ケンウッド電話機	1 台	2002 年 4 月
キャノンプリンター	1 台	2006 年 7 月

3 年間の収支バンランス

支出				収入			
項目	H21	H22	H 23		H21	H22	H23
管理費				**会費**			
人件費	2,232	2,232	2,232	法人	420	360	360
管理費合計	**3,069**	**3,037**	**2,962**	個人	1,690	1,710	1,981
				学生	50	85	80
				会費合計	**2,160**	**2,155**	**2,421**
事業費				**事業費**			
SV 語	4,214	5,678	5,909	SV 語	5,230	5670	5,451
研究講座	862	995	1,071	研究講座	642	729	784
委託事業	385	3,398	135	委託事業	3,938	0	150
事業費合計	**5,800**	**10,424**	**7,382**	**事業収入計**	**12,015**	**8,554**	**8,969**
合計	8,869	13,460	10,344				
事業費割合	**65.40%**	**77.44%**	**71.36%**				
当期収支	**3,174**	**△4,902**	**△ 1,380**				
次期繰越	**20,200**	**15,298**	**13,918**	**前期繰越**	**17,026**	**20,200**	**15,298**
総計	29,069	28,758	24,263	総計	29,069	28,758	24,263

正味財産増減計算書

平成２３年４月１日―平成２４年３月31日

（単位　円）

科目	金額
１．増加原因	
（１）会費収入	2,421,000
個人会費	(1,981,000)
学生会費	(　80,000)
法人会費	(　360,000)
（２）講演会収入	784,410
（３）講習会収入	5,450,700
（４）委託事業収入	150,000
（５）雑収入	10,860
（８）管理収入	5,704
増加原因合計	8,964,674
２．減少原因	
（１）管理費	2,962,173
（２）事業費	7,382,164
講演会	1,070,644
講習会	5,908,980
調査費	80,000
委託事業	135,000
その他	179,290
減少原因合計	10,344,337
当期正味財産増加額	△1,379,663
前期繰越正味財産額	15,297,979
期末正味財産合計	13,918,316

社団法人　スウェーデン社会研究所

監　査　報　告　書

平成 23 年度の本研究所の業務報告について適正であることを報告いたします。

平成 24 年 6 月 4 日

社団法人　スウェーデン社会研究所

監事
藤井　統司

第２号議案

（社）スウェーデン社会研究所
平成 24 年度　事業計画

１．スウェーデン研究講座

132	2012.04	What I want to tell you my observations in Sweden as an ordinary house wife	Ms. Hideko Ueki Evacuee to Tokyo from Iwaki City damaged by 3.11 nuclear accident and tsunami
133	2012.05	Assistive Technology in Sweden	Dr. Claes Tjäder Research Director, Swedish Institute of Assistive Technology
134	2012.06	Stage dramas in Sweden centering on August Strindberg	Ms. Mako Moori Stage Actress
135	2012.07	Swedish policy for cultural exchange with foreign countries	Ms.Nanatsu Kagao Researcher at Uppsala University
136	2012.08		
137	2012.09		
138	2012.10		
139	2012.11		Students at Tokai University
140	2012.12		
141	2012.01		
142	2012.02		Students at Meiji University
143	2012.03		

２．スウェーデン語講座

講師　　：速水　望
副講師　：未定　（公募）

場所：六本木サクセスビル 303 号、スウェーデン語教室
授業日：毎週火曜、木曜、土曜日

授業内容：基礎文法、会話、読解、通信講座

春学期　４月－６月
夏学期　７月―９月
秋学期１０月―１２月
冬学期　１月―３月

３．所報発行　第 354 号―357 号　（野崎理事担当）

４．委託事業

公益財団法人　ハイライフ研究所と共同で、「電子版　スウェーデン百科事典」の作成

５．講演

６．外部組織への協力

７．マスコミからの取材

８．情報提供

９．情報再配信

１０．会合とパーティ

以上

（社）スウェーデン社会研究所
平成24年度収支予算計画書

自平成24年4月1日
至平成25年3月31日
（単位　円）

支出の部		収入の部	
費　目	金　額	費　目	金額
（管理費）		**（管理収入）**	
給料手当	2,232,200	雑収入	
通信費	280,000		
事務費	84,000		
事務所費	240,000		
租税公課	70,000		
雑費	15,000		
交通費	20,000		
予備費	20,000		
小計（A）	**2,961,200**	**小計（A）**	
（事業費）		**（事業収入）**	
講演会　（研究講座）	1,000,000	会費	2,500,000
講習会　（語学教室）	6,000,000	個人会費	*2,050,000
調査費　（所報）	100,000	学生会費	＊　90,000
通信費　（ホームページ）	160,000	法人会費	＊　360,000
委託事業費	3,200,000	講演会収入	750,000
		講習会収入	6,000,000
		委託事業収入	4,000,000
小計（B）	10,460,000	**小計（B）**	**13,250,000**
合計(A+B)	**13,421,200**	**合計（A＋B）**	13,250,000
当期収支差額	△171,200		
次期繰越	**13,747,116**	前期繰越	13,918,316
計	**27,168,316**	**計**	**27,168,316**

第３号議案

社団法人スウェーデン社会研究所
平成24年３月３１日現在

法 人 会 員

㈱新生銀行
全日本自治団体労働組合
学校法人東海大学
公益財団法人ハイライフ研究所
望星サイエンス㈱
ワレニウス　ウイルヘルムセン　ロジスティックス　アジア
（６社）

社団法人スウェーデン社会研究所（順不同）

＜平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 3 1 日　新規入会者＞

法人会員：　1 社

公益財団法人ハイライフ研究所

個人会員：　３５名

上岡美保子、岡田弥生、大橋照枝、内田　寛、小比賀祥宣、小比賀朝美、内田栄治、
大内一也、荒木義修、大石孝子、太田しおり、大野　歩、加藤哲朗、小針健太郎、
杉山　修、櫻　博子、作花純江、酒本登美子、平田史明、戸羽　晟、田村恵美子、
高木知子、西下彰俊、西村容子、中川弘子、永島良子、畠山兵衛、橋本晴子、藤木忠慶、
藤代洋行、三村朋寛、松井直樹、米村紀幸、横江修一、山下英明、

学生会員：　7 名

鈴木　昇、道丹わかな、佃　優希、高田知樹、深澤朋子、松田俊介、吉田貴司、

＜平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日　退会者＞

法人会員：　1 社

山王総合株式会社

個人会員：7 名

1、　住所、メールアドレス不明：２名
　北河紀人、北村光子、
2、　退会届受理：５名
　岡本藤三、木内杏寿、鈴木雅之、松村祐子、多田昌司、

学生会員：3 名

1、　会費２年間未納退会：1 名
　牧原ゆりえ、
2、退会届受理：２名
　大野　歩、小針健太郎、

個人会員　　２０７名（含役員）
学生会員　　２１名

法人会員　　6社
合計　２３４名
（平成23年3月31日現在）

第4号議案

社団法人スウェーデン社会研究所
平成24年3月31日現在（順不同）

役　員　名　簿

名誉会長理事	松前　紀男	東海大学名誉教授、法人顧問
理事長	瓦林　聖児	（社）日瑞基金理事
顧　問	原　禮之助	㈱はやまキャピタル　代表取締役（１名）
常務理事	川崎　一彦	北海道東海大学教授
	須永　昌博	㈱ノルディック商会　代表取締役
理　事	松前　達郎	東海大学総長
	後藤　亘	㈱エフエム東京　名誉相談役
	池田　研二	元埼玉医科大学教授
	遠藤　勲	元埼玉県産業技術総合センター総長
	都倉　亮	元都倉インターナショナル㈱代表取締役
	野崎　俊一	産業能率大学講師
	ホーヌマルク　紀子	ホーヌマルク㈱　取締役
	波多野　裕	元日本エリクソン㈱
	林　壮行	元㈱日刊現代スポーツ編集部編集委員
	岩崎　哲郎	茨城キリスト教大学教授
事務局長理事	池田　冨士太	㈱科学新聞社　会長（１５名）
評議員	五月女　律子	北九州市立大学助教授　（１名）
監　事	藤井　統司	インター・アソシェイト・ジャパン　社長

第５号議案

（社）スウェーデン社会研究所
会計処理規則

１．10 万円を超える出費は理事長の承認を必要とする。

２．理事長の承認は文書・メールをもって行う。